

AMCoR

Asahikawa Medical College Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録 () 平成18年度:47-48.

「皮下埋め込み式ポートを用いた外来化学療法へのスタッフ教育の検討」

黒崎, 明子 ; 湯澤, 博子 ; 小澤, 和永

「皮下埋め込み式ポートを用いた外来化学療法へのスタッフ教育の検討」

点滴センター ○黒崎 明子、湯澤 博子、小澤 和永

はじめに

近年、埋め込み式ポートを用いた外来化学療法の件数も増加している。さらに在宅中にポートのトラブルが生じた場合、適切な管理やケアができるための効果的なスタッフ教育が必要である。今回、皮下埋め込み式ポートを用いた外来化学療法に対応するために、点滴センターに勤務する外来スタッフの初期教育に取り組んだ。今後の効果的なスタッフ教育に役立てるために、教育の効果や技術習得が困難な点を明らかにすることを目的とする。

研究方法

【対象】 研究参加に同意が得られた当院外来看護師 8 名

【期間】 調査期間は、2006 年 2 月 15 日～3 月 9 日

【方法】

- 1) 対象者に 2 回の学習会の参加とポート管理マニュアルを作成し配布した。
- 2) 1) の教育前後に独自に作成した質問紙調査を行った。
- 3) 調査内容は、ポートを用いた化学療法の経験と患者指導経験の有無、ポート管理の手技習得に関わる「ポートの構造理解」「ポートのカテーテルの特徴理解」「インフューザーの構造理解」「穿刺針の適切な選択」「穿刺部位の位置確認」「穿刺部位の消毒」「ヒューバー針の穿刺」「針の正確な刺入を確認」「ヒューバー針の固定」「固定ドレッシングの選択」「フラッシュとロック」「ヒューバー針の抜針」「インフューザーの残量判断」「治療中のポートとインフューザーの観察」「ポート合併症の理解」の 15 項目とした。また、ポートの管理で困難を感じている点を自由記載してもらった。

- 4) 分析は、質問項目の 5 段階評定を点数化し、SPSS for Windows Ver.10 を用いて Wilcoxon の符号付き順位検定を行い、学習会前後の変化をみた。有意水準は 5 % とした。

5) 学習会の実際

1 回目は約 70 分で、ポートとヒューバー針の原理と構造、カテーテルの特徴、ポート合併症等に関する講義、ポートの穿刺、抜針、陽圧ロックを模型で体験した。2 回目は約 60 分でインフューザーポンプの原理

と構造や取り扱いの注意点、実際にバクスターインフューザーへの薬剤充填を体験した。

倫理的配慮

対象者に研究目的を説明、この研究への参加は自由意志によるもので、研究に参加の有無により不利益をこうむることはないこと、研究の過程、研究の最終報告においても、データの守秘プライバシーを保護し、個人が特定されることはないことを伝え、同意を得た。

結果

質問紙調査に回答が得られた 8 名のうちポートを用いた化学療法の経験は、有が 7 名、無が 1 名であった。患者指導経験が有るのは 3 名、無いものは 5 名であった。

1. 学習会後の変化

対象者 1 人が、質問紙の 15 項目に最高得点 (5: そうである) を回答した場合の最高得点は 75 点である。対象者別学習会前後の総得点の比較を図 1 に示した。さらに、Wilcoxon の符号付き順位検定を用いて、学習会前後を比較すると、有意確率 (両側) $p=0.012$ で有意差が生じた。

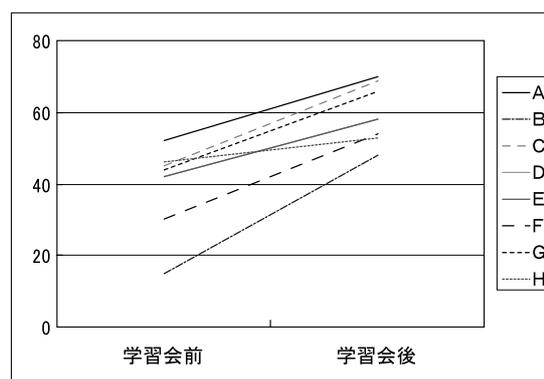


図1 対象者別学習会前後の総得点の比較

2. 学習会前後の項目毎の比較

15 項目毎に学習会前後の得点を比較した結果、「穿刺部位の消毒」を除いた他 14 項目の得点は上昇傾向を示した。特に、「ヒューバー針の正確な刺入の確認」(図 2)「治療中のポートとインフューザーの観察」「ヒューバー針の抜針」においては上昇した。

しかし、学習会後も得点が低くばらつきがあった項目は、「穿刺針の適切な選択」(図 3)、「フラッシュとロッ

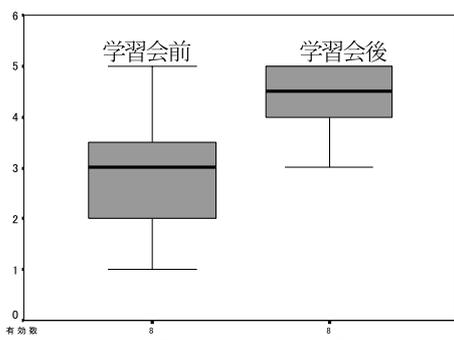


図2 ヒューバー針の正確な刺入の確認

ク」(図4)であった。次いで「ポートの構造理解」「インフューザーポンプの構造理解」「ポートの合併症の理解」等の知識項目の得点が低い傾向となった。

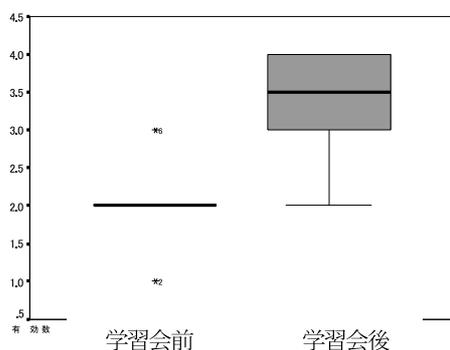


図3 穿刺針の適切な選択

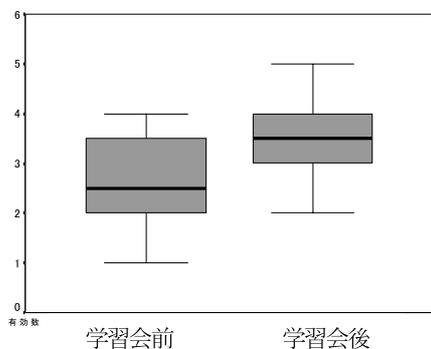


図4 フラッシュとロック

学習会後のポート管理で困難を感じている点についての自由記載の回答は、患者の体動後針が抜けてこないように固定するのが難しいという固定方法に関すること、患者にあった穿刺針やドレッシングの選択、トラブル症例の対応などがあった。その他、知識としては理解しても実際に患者さんにやっていないので不安が残る、よく知らない項目も従来のやり方を真似て行っている危険な状況と認識したという回答があった。

考察

今回の教育内容はポートとインフューザーポンプの基礎的知識と実際の物品を用いた体験を盛り込んだものである。学習会前後の分析結果から有意性を示し、全体として学習会の効果があったものと考えられる。特に実際にポートに穿刺しセプタムの底に接触した感覚やインフューザーポンプに充填し流す等の実技を経験することで技術面の効果がみられたと思われる。しかし、患者に応じたポートの位置や皮下組織の程度にあった「穿刺針の適切な選択」や終了後に行う「フラッシュとロック」の項目の得点が低かった。これらの項目は、実際にポートを埋め込まれた患者に実践しているわけではないため、実際の感覚がつかめず、難しいと感じた要因になったと思われる。その他、自由記載内容には、対象個々によって異なる状況のヒューバー針の固定方法やトラブル事例の対応に関することが多くあり、個別性に対応することに困難を感じている。そのため、演習の中で固定方法について具体的な明示やピンチオフや針のずれによる薬液漏出等の具体的な合併症事例への対応を盛り込んでいくことが必要である。また、一連の手技のチェックリストを作成し、なぜそのようにするのかを知っているかどうかをチェックしながら実地訓練をするなどの段階的な方法が必要である。

結語

今回の教育内容は、初期段階のポートを取り扱う上での理解度や手技習得に対し効果があった。しかし、患者の個性に対応する手技項目に関しては困難を感じており、継続教育が必要である。

参考文献

- 1) 足利幸乃ほか：埋め込みポート取り扱いの実際とトラブルについて、がん看護 10, 524～530, 2005.
- 2) 成田円ほか：採血技術演習の実際と今後の課題～静脈血採血の技術演習を困難にしている要因の検討～、市立名寄短期大学紀要 36, 31～41, 2004.